

特集

「星つむぎの村」の活動紹介

～学生の参画事例～

谷口加奈子（一般社団法人 星つむぎの村）

1. はじめに

本稿では星つむぎの村について、また星つむぎの村で学生が積極的に関わっている活動についてご紹介します。

1.1 星つむぎの村とは

星つむぎの村は村のミッションである「星を介して、人をつなぎともに幸せをつくろう」に共感した村人（メンバー）の集まりです。

私たちは、科学的な根拠にもとづきつつ物語を大切に、各々の興味関心や得意なことを活かし、山梨を中心に全国で様々な活動を行っています。活動はプラネタリウムや観望会の開催、星空縁日、ワークやグッズの開発、ライトダウンやまなしの事務局や月一度の村通信の発行など多岐にわたっています。それら活動の中でも、村で特に力を入れているのが「病院がプラネタリウム[1]」です。

1.2 病院がプラネタリウム

本物の星空を見られない人たちにこそ、星空を届ける意義があると考え、私たちは病院や養護学校、医療施設への移動プラネタリウムを行っています。件数は年々増加し、2018年は70回以上の実施を予定しています。

病院は高い危険が伴う場所ですから、私たちは活動のリスク管理をする際、病院を想定して行っています。2018年からは複数回の研修を通し、私たち独自の「安全管理マニュアル」や「ボランティアマニュアルの」作成ブラッシュアップを行っています。活動の体験者の心身両面に配慮して、寄り添うとはいったい何か、常に向き合い続けています。

2. 学生の活動事例

星つむぎの村での学生の活動事例を3つご紹介します。

2.1 アルビレオ

一つ目は「アルビレオ」という学生団体です。「病院がプラネタリウム」に共感した10名の大学生が、これまでに北陸三県の4つの大学病院で「白い天井のその先に」と題しプラネタリウムやワークショップを開催、入院している人たちに星空を通して癒しや希望を届けています(図1)。星つむぎの村のメンバーである富山大の学生が、投影を行うため、星つむぎの村はプラネタリウム機材の提供や研修を行う一方、アルビレオメンバーは、資金集めや病院との調整、広報、現場作業を担いました。



図1 アルビレオの活動の様子

子どもたちが寝転がって一緒に星を眺めている。

2.2 星の子クラブ

二つ目は、小中学生向けの活動「星の子クラブ」です。

星の子クラブでは村人による学習会、星空観望会、ワークショップといった活動を月1回から2回行っています。ポイントは、星の子たちが村のイベントにスタッフとして参加できるということで、観望会での説明や、ワークショップの宣伝、運営など、一人一人が自主的に役割を見つけ、楽しみながら活動しています(図2)。



図2 星の子クラブの活動の様子
天体の紹介をしている星の子の姿。

2.3 病院がプラネタリウムのアンケート

三つ目に私自身が関わってきた活動を紹介します。患者さんやご家族、医療関係者に「病院がプラネタリウム」がどう捉えられているのか、以前はなかなか何う事ができませんでした。そこで、感想を空き時間に記入していただき、後から見返せるアンケートの作成を村に提案しました。作成に当たり、

- ・感想の見える化
- ・プラネタリウムの効果をはかること
- ・参加者からアドバイスをいただくこと

の3点を目的とし、患者さん用とそれ以外の方用の二種を4月から実施しました。

1. 今日プラネタリウムを見る前の「からだ」と「こころ」の調子に○をしてください。



2. プラネタリウムを見た後の「からだ」と「こころ」の調子に○をしてください。



図3 患者さん用アンケートの解答一例

プラネタリウムを見る前後で体や心の調子について、「ひどい、よくない、ふつう、よい、すばらしい」の5段階で答えてもらう。この他に自由に感想を書くスペースを設けている。

患者さん用は負担が少ないよう問数を絞り、気軽に答えやすくするためフェイススケールを用いました(図3)。

患者さん以外へのアンケートは、感想だけでなく「イベントの中で気になったことや危険につながりそうなことはありましたか?」という質問項目を設け安全対策につなげようと考えました。またご家族や医療関係者は普段患者さんを間近で見ているため、投影前後の患者さんの変化も記述していただけることを期待しました。すでに20施設以上300人を超える方に回答をいただいています。

(1) いただいた感想から

「なんであんなに星があるんだろうな?」、「病棟にいることを忘れる事ができた」、「日々子どもとだけ向き合っている付添いの自分にとってかけがえのない時間をいただけた」など、集まった感想からプラネタリウムによる癒し効果がたしかにあると実感しました。このアンケートを定量的、定性的に分析

していくことで、単なる娯楽や学習にとどまらない、「プラネタリウム療法」の可能性が見えてくると私たちは考えています。いくつかの感想を、以下にそのまま掲載します（図4）。

感想が湧いてきて、手を伸ばせば届きそうでした。
子ども達と一緒に天井に手を伸ばして木星に近づいた時、一体感から心から楽しかったです。

4. 印象に残った場面や出来事があればお願いします。

フジタリウムでの見学の目的
大きな宇宙で私たちの命は、ほろけたりと
確実に天体に映し出されている地球に、いること、命と大か
した、と思ひました。

~~フジタリウム~~ ~~フジタリウム~~
フジタリウムで、手を伸ばせば届きそうでした。
フジタリウムに連れて行ってあげたけれど、声を出したりすると他のお客様に迷惑をかけるかもしれないこと、入館できなかった経験があったので、今日は夢がかなったこと、とてもHappyでした。

一日中、子供の指を忘れ、一緒に楽しむことができた。
対象の星は非常に種に多く見えていたが、瞳の中に地球や星が映り、
星とつながりを感じた。
とても楽しかったです。

フジタリウムで、手を伸ばせば届きそうでした。
フジタリウムに連れて行ってあげたけれど、声を出したりすると他のお客様に迷惑をかけるかもしれないこと、入館できなかった経験があったので、今日は夢がかなったこと、とてもHappyでした。

図4 実際にいただいた感想

(2) いただいたアドバイスから

一方、活動の中で気になったことについて、4点ご指摘いただきました。一点目は視界いっぱいの映像の特性上起こりうる画面酔いです。二点目はドーム内の温度上昇です。患者さんの中には温度変化が脅威になる方もいらっしゃいます。三点目は出入りの危うさで、想定より暗くなったというご意見や、治療等に伴い発生する投影中の移動が不安だという意見がありました。四点目が感染症で、些細な病原菌が命にかかわることもあります。

これらアンケートから見えてきた課題を受けて、私たちは対応策を考え、安全管理マニュアルを随時更新しています（図5）。

画面酔い対策として「動きのある場面での事前の声がけや、操作速度を落とす」ことを行い、温度管理のためには「定員を減らす」といった対応策を取っています。出入りが危ないという意見には、「赤ライトを村で用意しておき必要に応じて医療関係者に渡すこと、村人が連携して出入りを補助すること」を新しく決めました。感染については、日本環境感染学会の「医療従事者のためのワクチンガイドライン」に沿って感染予防に努め、そのことをウェブサイトやボランティアマニュアルに明確に記載するようにしました。

このように私たちは、患者さんやご家族、医療関係者の意見を受け、より安全に、誰もがストレスなく楽しめるような空間づくりを目指し続けています。



図5 今年9月に行われた研修合宿の様子
出てきた課題をもとに、対応策を議論した。

(3) これからの展開

集まったアンケートはきちんとした分析がまだできていません。これから量的、質的両面で回答を分析し、プラネタリウムがどんな効果を生み出しているのかについてまとめていきたいです。

また、感想や分析結果を星つむぎの村のメンバーに共有していくことで、メンバーの活動参加に対する充実感や満足度の向上につな

がりうるのではと考えています。

3. いただいた質問から

11月25日の関東支部会での発表時に頂いた質問への解答を改めて掲載します。

3.1 マニュアルの公開はする予定か？

安全管理マニュアルやボランティアマニュアルは実施先の施設などに示すことがありますが、現在ネットへの公開予定はありません。しかしながら、作成のノウハウなどはお力になれることもあるかもしれません。

3.2 医療従事者がプラネタリウムの効果について発表したケースはないのか？

国立甲府病院は、これまでに20回以上実施されていることもあり、2年にわたって、医療保育士が、重度心身障害をもつ利用者さんの中から、「注視グループ」をつくって観察を続けてきました。その結果が、先日開催された「国立病院総合医学会」で発表されています。投影の間は、利用者さんは非常に集中力が高まり、見た後のリラックスにつながっているという結果でした。

3.3 プラネタリウム療法のエビデンスをつくっていくには、同じ場所でリピートできることが必要なのでは？

たしかにその側面もあり、上記のように繰り返し通っている場所だと調査しやすいということがあります。一方で、1回のみのお訪問であっても、多くの事例を分析することで、その前後の変化についてプラネタリウムの効果のみていくことはできるのではないかと考えています。

4. おわりに ～星つむぎの村×学生～

村にとっては、学生は活動の担い手であり、村の想いをつなぎ、伝えていく相手であるという位置づけです。一方、学生にとっては村の活動は社会参加の場です。それに加えて、星つむぎの村にはお互いを認め、尊重しあうあたたかさがあり、村は心地のよい居場所であるとともに学生でも意見を出しやすく積極的に関わっていける空間となっています。そんな中で学生は村を通して、また村は学生を通して新しいアイデアを得、つながりを得、相互に作用しながら新たな未来へ向かっていくのだと思います。

活動に共感してくださった学生さん（もちろん学生以外でも）、いらっしゃったら、ぜひ共に星を見上げましょう！

文 献

- [1] 高橋真理子 (2016) 「病院がプラネタリウム—ホンモノの星空が見られない人に届ける星空」, 2016年天文教育普及研究会集録, pp.40-44
- [2] 病院がプラネタリウム公式ウェブサイト <http://hospla.net>



谷口 加奈子